

意外性のある資料の発見を促す図書館探索支援システム

丸田夏菜子

図書館は豊富なコレクションを提供しており、利用者はそれらを自由に利用することを保障されている。しかし実際には、利用者の興味や探索行動の習慣などにより、手に取る資料は限定的で偏ったものになるという問題がある。このような問題に対して、利用者が初めて興味を持つような、意外性のある資料との出会いを実現することによって、利用者の資料のアクセス範囲を拡張し、図書館のコレクションを有効に活用してもらうための研究が行われている。その一つに、坂本が考案した「トレーシング」の研究がある。トレーシングは、指定した経路で資料を探索してもらうことによって利用者を普段立ち寄らない書架へと誘導し、意外性のある資料に出会うことを可能とする。しかし、トレーシングでは移動が最短となる探索経路のみを用いており、資料の発見に大きな差があると考えられる探索経路の違いによる効果は検討されていない。

そこで本研究では、探索経路を指定し探索の過程で意外性のある資料の発見を促す図書館探索支援システムを実装し、探索経路の違いによって意外性のある資料の発見にどのような影響があるのか明らかにすることを目的とした。提案システムは、探索テーマに沿った資料のリストをもとに、画面上に資料の書誌情報（タイトル、著者、分類番号）と図書館の館内図、資料までの経路を1冊ずつ提示する。

評価実験は筑波大学の学群生・大学院生22名を対象につくば市立中央図書館にて行った。システムで提示する経路として、近くに配置されている資料を「複数回に分けて探索するパターン」と「一度に探索するパターン」の2パターンを用意し、実験参加者を2群に分けて実験を行った。実験参加者には、システムの画面に表示された資料7冊を探して持ってきてもらい、興味がある資料を発見した際には、その資料も持ってきてもらうよう指示した。実験後には経路を用いた探索やシステムに対する評価などを問うアンケートおよび聞き取り調査を行った。

実験の結果、「システムがよい本に出会うきっかけを与えた」の平均評価値が4.45（最大5）、「システムが新しい興味や新たな発見を与えた」の平均評価値が4.23（最大5）であったことから、意外性のある資料や新たな興味の発見を促すことができた可能性が示された。また、同じ場所を複数回に分けて探索した方が興味がある資料を多く発見していることから、探索経路の違いが意外性のある資料の発見に影響する可能性が高いことが示された。システムの使いやすさや満足度などシステムに対する評価は、すべての質問項目に対して平均評価値が4以上であったため、誰でも簡単に操作できるシステムとなったと評価できる。

本研究では、経路を指定することで意外性のある資料の発見を促す図書館探索支援システムを実現し、同じ場所を複数回に分けて探索する経路が意外性のある資料の発見に効果的である可能性を明らかにした。今後の課題は、個人の読書経験や図書館利用経験が、資料の発見にどのように影響を与えているのかを分析することと、条件の異なる図書館でシステムの効果の検証を行うことである。

（指導教員 松村敦）